琉球大学学術リポジトリ

ヴェルレーヌ評伝中のある挿話に関する疑問：詩人の葬儀でオルガンを演奏したのは誰か

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2008-05-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西森, 和広, Nishimori, Kazuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002003937

Ryudai Review of Euro-American Studies No. 52, 2008

ヴェルレーヌ評伝中のある挿話に関する疑問：詩人の葬儀でオルガンを演奏したのは誰か

西森　和広

1．ヴェルレーヌの葬儀におけるオルガン奏者の問題

プレイヤッド叢書『ヴェルレーヌ詩作全集』ジャック・ボレル修正（新）版（*Œuvres poétiques complètes*, édition révisée par J. Borel）の年表欄に、詩人の葬儀について次の短い記述がある：《*Vendredi 10 janvier:* Obsèques de Verlaine à Saint-Etienne-du-Mont, où Théodore Dubois et Gabriel Fauré sont aux grandes orgues. (p.XLVI)》（1月10日金曜日：サン・テチエンヌ・デュ・モン教会にて葬儀、テオドール・デュボワとガブリエル・フォーレが大オルガンに就く）。ここで二人挙げられたオルガン担当者の名前が気に掛かる。ガブリエル・フォーレはむろん現在では大作曲家として名を残しており、またヴェルレーヌとの交流についてもかなり知られている。デュボワの方はと云えば、その名は音楽の専門家の間で知られるに留まるだろう。『新グローヴ音楽辞典』などによれば、彼は当時を代表するオルガン奏者、音楽家であったが、今日では専ら音楽教育の分野での著作によって名を残す存在である。「ラヴェル事件」の時のパリ音楽院（Conservatoire national supérieur de musique）の院長と言った方がより興味を引くかもしれない。モーリス・ラヴェルがフランス音楽界における登竜門、ローマ大賞に3度応募したが1等を獲得できず、4度目の挑戦では遂に年齢から応募資格なしと門前払いを食わされた出来事で、すでに新進の作曲家として名を知られつつあった彼へのこの扱いはスキャンダルとなる。結局デュボワは院長職を辞することになる。それはヴェルレーヌの死の9年の後のことであり、1896年1月の時点で、彼はパリ音楽院に担当講座を有してはいたが、公式にはマドレーヌ寺院のオルガン奏者職（音

楽部門の主席）にあり、院長となるのはその数ヵ月後である。そのキャリアのステップからも想像されようが、マドレーヌ寺院のオルガン奏者職は平凡な地位ではなかった。マドレーヌ寺院は、カトリック教会としての歴史の始まりこそ新しかったが（1840年）、建立の経緯（ナポレオンは栄誉の殿堂とするつもりであった）や行政地区に近いという立地条件などから、国葬や重要人物の葬儀が行われ、パリではノートルダム大聖堂に継ぐような重要な教会であった。その主席音楽家の地位は、パリの、ひいてはフランス全土の教会音楽家の中での最重要クラスと考えられた（Nectoux, p.45）。デュボワの前任者はサン・サーンスであったし、フォーレも当時デュボワの次席として合唱隊長（maître de chapelle）を務めており、デュボワのパリ音楽院院長就任後はその跡を継ぐことになる。そしてさらにラヴェル事件後には音楽院院長の跡をもフォーレは継ぐことになる。この二人がオルガンを奏したとすれば、まさしく国葬級といえようが、果たしてヴェルレーヌはそのような扱いを受ける存在であっただろうか。

先の記述はしかし現在通説のようになっている。定評のあるピエール・プチフィスの評伝『ポール・ヴェルレーヌ』（Pierre Petitfils, *Verlaine*）はこう記す：《La messe est dite par l'abbé Chanes. Théodore Dubois et Gabriel Fauré sont aux grandes orgues, le *Pie Jesu* de Niedermeyer est chanté par la maîtrise, l'abbé Lacèdre, le curé de la paroisse, donne l'absoute. (p.464)》（ミサはシャーヌ師により挙げられる。テオドール・デュボワとガブリエル・フォーレが大オルガンに就き、ニデルメイエールの「憐れみを、イエス」が合唱隊により歌われる。教区主任司祭のラセード師が棺側の赦祷を与える）。また比較的最近に出たアラン・ビュイジーヌの『ポール・ヴェルレーヌ、ある肉体の歴史』（Alain Buisine, *Paul Verlaine, histoire d'un corps*）もほぼ同様の記述をしている：《En l' église Saint-Etienne-du-Mont une messe basse est dite par l'abbé Chanes, et l'absoute est donnée par l'abbé Lacèdre. Gabriel Fauré et Théodore Dubois tiennent les grandes orgues. Sous la direction de M. Gros, le maître de chapelle, le *Pie Jesu* de Niedermeyer est exécuté par la maîtrise. (p.500)》（サン・テチエンヌ・

デュ・モン教会にて読誦ミサがシャーヌ師によって挙げられ、教区主任司祭のラセード師により棺側の赦祷が与えられる。ガブリエル・フォーレとテオドール・デュボワが大オルガンを受け持つ。合唱隊長グロ氏の指揮の下、ニデルメイエールの「憐れみを、イエス」が合唱隊により奏される)。しかし、何故彼らが演奏することになったのか、彼らと詩人との生前での接点はどこにあったかなど、色々興味深い点があるのにも関わらず、いずれの著作もこの両音楽家についての言及は以上の引用以外一切ないのだ。視点を変えてフォーレ研究の側から見てみよう。ジャン・ミシェル・ネクトゥーは、その浩瀚な『評伝フォーレ』(Jean-Michel Nectoux, *Gabriel Fauré, les voix du clair-obscur*) において、ヴェルレーヌとフォーレとの関係を作品と伝記の両面から詳しく探求している。フォーレの芸術にとってこの一歳上の詩人の存在は極めて大きかった。また七歳年長のデュボワが、フォーレにとっては常に近くで意識せざるをえないライヴァルであったことも具体的に描かれている。ところがネクトゥーはこの葬儀について、やはり年表中に「フォーレがオルガン演奏を勤めた(p.507)」と記すに留まる一方、デュボワへの言及は全くない。これはどういうことか。おそらくネクトゥーにも疑念があったのではないか。フォーレとデュボワとの関係からして、本務を離れて競演をするなど考えられようか。そもそもデュボワとヴェルレーヌの間に何か繋がりがあった事実を示すような証拠もないのだ。

ヴェルレーヌの側に戻って、アントワーヌ・アダンの名高い『ヴェルレーヌ、人と作品』(Antoine Adam, *Verlaine, l'homme et l'œuvre*) を読むと、さらに驚くべきことに、オルガン奏者はシャルル(=マリー)・ヴィドール(Charles-Marie Widor) とある (p.75)。ヴェルレーヌと同年生まれで、同時代で最も優れたオルガン演奏家として有名であったヴィドールは、ほぼ亡くなるまでサン・シュルピス教会のオルガン奏者の職にあり、詩人の死の当時もそうであった。作曲家としては一連の「オルガン独奏のための交響曲」などにより今日も記憶されている。彼もまたフォーレのライヴァルであったし、わずかな期間であるがサン・シュルピス教会でフォーレは彼の次席のオルガン奏者を務めていたこともある。

オルガン奏者の記述に謎が存在していることが分かるだろう。実は編著『ヴェルレーヌの墓碑銘』(Jacques Drillon, *Tombeau de Verlaine*) でジャック・ドリヨンがすでにこの問題を取り上げている。幾つかの文献の記述を取り上げ、様々な説の存在を指摘し、結局デュボワが担当したとするのが妥当としている(p.39)。同書はヴェルレーヌの死を巡る当時の様々な言説を収集した貴重な資料だが、この問題に触れている箇所は注釈としてのごく短いコメントであり、またその結論も性急と思われる。そこでドリヨンが引用した例も含め、オルガン奏者に関する主要な記述を集め、検討を加えてみることにする。

2．オルガン奏者についての証言

ヴェルレーヌの死が当時としては極めて多くの耳目を集めた出来事であったのは確かだ。多くの新聞・雑誌等で取り上げられ、それは諸外国にも及び、再婚しブリュッセルに住んでいた元の妻マチルド・モーテもほぼパリと同時にその死亡記事を読むことができた (Ex-Madame Paul Verlaine, *Mémoires de ma vie,* p.200)。また詩人と交流のあったジュール・ルナールの『日記』にはもちろん、ゴンクール兄弟の『日記』やプルーストの書簡などにもヴェルレーヌの臨終や葬儀に関する興味深い言及がなされている。ヴェルレーヌ没後に「詩王」の座を継ぎ、２年後に亡くなるマラルメの場合などと較べてみると、ヴェルレーヌの死がもたらしたニュース性の大きさは驚くほどである。その中で、彼の臨終と葬儀に関するまとまった資料として今日でも貴重なのが、『ラ・プリュム』(*La Plume*) 誌161号 (1896年２月１日－15日) の特集記事である。ドリヨンも引いているが、そこでのオルガン奏者についての記述がおそらく最も早い例であろう。当時の代表的な文芸誌の一つでヴェルレーヌ自身も寄稿していた『ラ・プリュム』の主幹レオン・デシャンは詩人との交流も深く、その遺児ジョルジュに仕事上の便宜を図るなどしてもいる。当該号は詩人の追悼特別号として、200名もの文人らに対し、最も優れたヴェルレーヌ作品及び「詩王」の後継者、という二つの質問アンケートを行い、そのコメントと結果を載せるほか、臨終から葬儀に至る経過報告、マラルメ、コペー、バレスらの行っ

た追悼演説の原文、また各種の伝記資料や証言、未刊の詩集『肉体』(*La Chair*) の全文掲載など大部のものとなっている。その葬儀当日の記事からオルガン奏者のくだりを見てみよう。

> La cérémonie religieuse a lieu à Saint-Etienne-du-Mont: une messe basse chantée en plain-chant par toute la maîtrise sous la direction de M. Gros, maître de chapelle, et célébrée par M. l'abbé Chanes, vicaire. L'absoute est donnée par M. l'abbé Lacèdre. Le grand orgue est tenu par M. Théodore Dubois, organiste de la Madelaine; il exécuta *Pie Jesu*, de Niedermeyer. (p.119)

ミサを執り行ったシャーヌ師と棺側の赦祷を与えたラセード師、合唱隊長グロ、そしてオルガン奏者デュボワと彼が演奏したという「憐れみを、イエス」の作曲者ニデルメイエールらの名が登場しており、冒頭で引用したプチフィスあるいはビュイジーヌの記述の原型をここに認めることができる。ただ驚くべきはフォーレの名がまったくどこにもないことだ。さらに加えて二つの注目すべき点がある。一つは、先に挙げた二つの評伝とは異なり、ミサは合唱隊により単旋聖歌(グレゴリオ聖歌など)で「歌われた」という点である。両評伝をよく読むとどちらも「ミサが歌われた」とは記さず、「シャーヌ師により挙げられた(唱えられた)」としている。もう一点は、両評伝のようにニデルメイエールの「憐れみを、イエス」は合唱隊により歌われたのではなく、デュボワがオルガンで演奏したという点だ。これらについては後述する。

『ラ・プリュム』誌の記述についてはひとまず置いて、次に翌1897年刊行のフェルナン・クレルジェ『ポール・ヴェルレーヌと同時代人たち』(Fernand Clerget, *Paul Verlaine et ses contemporains*) を見てみよう。この著者がヴェルレーヌの信奉者であったことは間違いない。詩人の顕彰碑を建立する委員会の会計係を務めたという彼のこの著作は、実はその顕彰碑建立を推進する意図を持った宣伝パンフレットとしての役割を持つというユニークなものだ。当初匿名で出版され、「公平な一証言者による」とのみ記されていたが、顕彰

碑建立に反対する人々への反論と世論の喚起の意図が濃厚で、「公平」というのはかなり皮肉である。また本書を匿名にしながら、クレルジェは別の自著の中で自作目録に本書名を平気で書き入れ、また本書中にも顕彰碑建立委員会の会計係として自分の名を明記するなどして、おそらく当時も著者名は公然の秘密であったものであろう。その執筆意図からして、急いで書かれたと見え、80頁程の小冊子である。以下に当該箇所を引く。

> A l' église Saint-Etienne-du-Mont, l'abbé Chanes dit une messe basse, chantée par toute la maîtrise sous la direction de M. Gros, maître de chapelle. L'absoute fut donnée par M. l'abbé Lacèdre, et le grand orgue tenu par M. Théodore Dubois, organiste de la Madelaine, qui exécuta *Pie Jesu*, de Niedermeyer. (p.68)

基本的に先の『プリュム』誌の記述と変わらず、それに基づいた記述と見做される。またこの箇所の前段では、葬儀の参列者の名を相当数に渡り列挙し続けているが、それはおそらくヴェルレーヌの死をどれだけ多くの著名人士が悼んでいるかを強調するために他ならないだろう。個人の記憶と言うより、明らかに参列者名簿を参照したような記述であり、やはり上述した意図が濃厚なパンフレット的著作と見るべきである。

次に、個人の回想録としてはより重要な著作の一つ、詩人の竹馬の友、エドモン・ルペルチエによる詩人伝（Edmond Lepelletier, *Paul Verlaine, sa vie, son, œuvre*）から当該箇所を見てみたい。初版は1907年で、詩人の死後10年余りが経過し、やや記憶も薄れつつある時期かもしれないが、この出版以前から著者は多くの誌面で断片的な回想録を発表しており、十分な準備の上での公刊であったろう。立派なヴェルレーヌ像を描こうとしすぎるとしばしば評されてはいる。特にマチルドやランボーその他の愛憎入り乱れるような交流関係などについてはそうかもしれない。が、それらの関係の深い部分についてはルペルチエも知り得ぬ事情もあったかもしれないし、ことさらに書くべきことではないという判断も当然あったろう。幼なじみであったからこそ書かないこと

もあろう。だが詩人の葬儀の様子を伝える箇所などについて言えば、当日の気候などを淡々と記すなど、かなり冷静な筆致で描いているように見える。少々長くなるが、葬儀の手配に関する記述を含めて当該箇所を見てみよう。

> Avec quelques amis du poète, je me suis occupé des obsèques. Après avoir pris avec la maison Borniol les dernières dispositions pour le convoi, nous nous sommes aussi entendus avec le curé de Saint-Etienne-du-Mont pour le service religieux. M. Léon Vanier l'avait déjà commandé, mais il parut insuffisant, étant donnés, d'une part, les sentiments religieux du défunt, et aussi l'affluence considérable qui devait se rendre aux funérailles. [...] Après le service religieux, qui fut célébré au maître-autel, avec chants, musique, et le maître de chapelle Fauré tenant les grandes orgues, le cortège se mit en route à travers Paris, pour gagner les Batignolles. (pp.542-543)

葬儀の手配についての記述は興味深い。出版者で、晩年の詩人を経済的に支えた一人であるレオン・ヴァニエが単独で埋葬だけの簡単な葬儀を当初予定していたが、親しい友人らが「故人の宗教心もあり、また葬儀への列席者も溢れるほどになるだろう」と判断し、サン・テチエンヌ・デュ・モン教会で宗教儀式（ミサ）を挙げるよう決めたというのだ。引用後半は葬儀の様子を伝える文章だが、実に簡素な表現で終っている。それはルペルチエ自身の信仰態度に由来するのだろう。そもそも彼はミサの語すら用いていない。しかし教会での儀式が「歌と音楽を伴い、合唱隊長フォーレが大オルガンを担当」したという点は明瞭に記している。不信仰者の視点から記憶すべきことは少なかったが、十年の後にも記憶に残った事実は、歌と音楽、フォーレのオルガン演奏なのである。これは重要な点と思われるが、これについてもひとまず置いて次の資料に移る。

F.A. カザルスとギュスタヴ・ル・ルージュ共著になる『ポール・ヴェルレーヌの最後の日々』(F.A. Cazals et Gustave le Rouge, *Les Derniers jours de*

Paul Verlaine) である。

本書は1911年刊行で、ルペルチエよりもさらに少し後になる。著者の両名とも詩人が晩年を親しく接した若い友人として知られる。特にカザルスは晩年の交友関係で最も重要な存在として知られる。該当箇所を引いてみよう。

> Ce fut au milieu d'un cortège triomphal que les restes du grand poète furent transportés à l'église Saint-Etienne-du-Mont. Des tentures, avec le V initial en argent, en décoraient le portail. Un catafalque était dressé au milieu de la nef. Les marches de l'autel étaient recouverts d'un tapis noir. Une messe basse fut dite par l'abbé Chanes. Théodore Dubois et Gabriel Fauré, tinrent les grandes orgues et le *Pie Jesu* de Niedermeyer fut exécuté par la maîtrise sous la direction de M. Gros, maître de chapelle. (p.26)

詩人の葬儀の様子がかなり詳細に、しかも華々しい筆致で描かれた文章と言えよう。重要な点はここで初めてデュボワとフォーレの二つの名が併記されていることだ。「テオドール・デュボワとガブリエル・フォーレが大オルガンを担当し、ニデルメイエールの「憐れみを、イエス」が合唱隊長グロ氏の指揮の下、合唱隊によって奏された」と記す。「憐れみを、イエス」が合唱によって歌われたという記述もまたここで初めて登場する点にも注目したい。『ラ・プリュム』などではこの曲はオルガンで演奏されたことになっていたのだ。つまり最初に挙げたプレイヤッド版年表や、プチフィスとビュイジーヌの両伝の記述の源泉がこの著作にあるらしいことが分かる。この著作がヴェルレーヌ研究において重視されてきたのは、著作者と詩人の交流の深さがまずあり、また極めて詳細な記述が為されている点にもある。しかし逆にそのことがまた問題を生じさせたと言えなくもない。この著作をもって全てと信じるのは危険だろう。なお上の引用中フォーレの名の後に脚注参照の印があり、当該脚注には、《Alors maître de chapelle de la Madeleine, aujourd'hui directeur du

Conservatoire.》（当時マドレーヌ寺院の合唱隊長、今はパリ音楽院院長）とある。この評伝が出版された時点では確かにフォーレはデュボワの後任として院長職を継いでいた。著作者はこの事情に通じていた。この記述についても後述したい。

以上はヴェルレーヌと同時代を生き、詩人と親しく接した証言者らによるものであった。同時代の証言者としては他にもエルネスト・ドゥラエー、シャルル・ドノスらの重要な著作があるが、オルガン奏者に関する記述があるものとしては、1910年刊行のアルフォンス・セシェとジュール・ベルトーの共著『ポール・ヴェルレーヌ』（Aphonse Séché et Jules Bertaut, *Paul Verlaine*）など多くはない。そしてそこでの記述は、先のクレルジェ同様、『ラ・プリュム』誌を参照したと思われる程度に留まっていて特に付け加えるべき点はない。なおこの両著者と詩人との生前の交流は特に認められず、また同書が有名作家の評伝を集めた叢書中の一書であることなどからして、同時代の証言というより、詩人死後の研究の始まりを告げる第一世代の著作と見るべきかもしれない。

これより時代を下って公刊された著作はまさしく「歴史上の」存在としてのヴェルレーヌを研究した成果ということになる。その初期のまとまった成果と見做されるのが1938年刊行のY.G.ル・ダンテク校訂によるプレイヤッド旧版の『ヴェルレーヌ詩作全集』（*Œuvres poétiques complètes*, texte établi et annoté par Yves-Gérard Le Dantec）である。伝記的事項の詳細は同書の眼目ではないので、新版同様、葬儀の件は年表中に記載されるに留まっているが、こちらは『ラ・プリュム』誌の記述を踏襲して、オルガン奏者については《Théodore Dubois exécute le *Pie Jesu* de Niedermeyer. (p.XXII)》（テオドール・デュボワがニデルメイエールの「憐れみを、イエス」を奏す）とだけある。

翌1939年刊行のH.モンドール『ヴェルレーヌとマラルメの友情』（Henri Mondor, *L'Amitié de Verlaine et de Mallarmé*）はマラルメ研究者側からの貴重な著作だが、次のように記している：《Théodore Dubois (D'après Y.-G. Le Dantec) exécuta le *Pie Jesu* de Niedermeyer. Gabriel Fauré (D'après Lepelletier), était aux orgues. (p.241)》（テオドール・デュボワ

(ル・ダンテクに拠る) がニデルメイエールの「憐れみを、イエス」を演奏した。ガブリエル・フォーレ (ルペルチエに拠る) がオルガンに就いた)。本著作の眼目はあくまで二人の詩人の関係にあるのだから、モンドールにすれば、ことさらに気を使う必要のない問題だと思われるのに、わざわざ出典を示して二つの説を紹介したのは、やはり気になる点であったということだろう。オルガン奏者の記述に異説のあることに注意を向けたこれが最初の例ではないか。

ヴェルレーヌ研究は第二次世界大戦を挟んだ時期に大きな停滞期に入る。そして復興の時を告げるのが、先にも挙げたアダンの著作や同年 (1953年) 出版のジャン・リシェの『ポール・ヴェルレーヌ』(Jean Richer, *Paul Veraine*) などである。多くの有益な資料と論説に満ちたこの両著作は、オルガン奏者の件で奇妙な一致を見せている。いずれもこれまでの主要な資料に全く登場しなかったシャルル・ヴィドールの名を挙げていることだ。アダンとリシェの葬儀の場面の記述に関しては極めて似ているという印象がある。出版の正確な日付は不詳だが、アダンが参考文献としてリシェの同書を挙げているので、ヴィドール説はリシェの発案かと思われる。いずれにせよ両大家の記述の影響は大きかっただろう。おそらくこの説に従ったものと思われるが、アンリ・ド・ブイヤーヌ・ド・ラコストとジャック・ボレルの編纂による1960年刊行の良書叢書版『ヴェルレーヌ全集』(*Œuvres complètes de Paul Verlaine*, texte établi par Henri de Bouillane de Lacoste et Jacques Borel) でも、その年表においてやはりヴィドールの名を記している。しかしその共同編纂者であるボレルは、自身その後に改訂編纂したプレイヤッド新版ではこの説を退けているのは最初に紹介した通りである。ヴィドール説には他に有力な証言は今のところ見つからず、またリシェもアダンもその記述の根拠資料を明らかにしてはいないので、ヴェルレーヌ研究の一時的停滞がもたらした錯誤と考えたい。ヴィドールは当時随一と呼ばれた名オルガニストであり、そのことが新たな「伝説」を生み出したものか。当時そして生涯を通じてサン・シュルピス教会のオルガン奏者職にあったヴィドールが、交流はなかったと思われるヴェルレーヌのために、他教区の教会で演奏を行ったとはやはり考えにくい。

以上の諸研究を経て今日の状況に到るわけだが、従来ほとんど省みられなっ

た重要な証言が実は他にあるのだ。ヴェルレーヌという詩人と、フォーレ及びデュボワという音楽家との交流に関わる事項である以上、当時の文壇と音楽界の両方に通じているような人物の証言が重要と思われる、例えばドビュッシーやプルーストのような。しかし前者はことヴェルレーヌに関しては不思議な沈黙を守っており、そしてそれは詩人の側もそうである。また後者については残念ながら葬儀には出席していなかった。しかしここにその適格者がいる。それがロベール・ド・モンテスキウ伯爵である。貴族ディレッタントとしてヴェルレーヌの作品を早くから理解し、顔の広さを活かして社交界や行政関係者への働きかけを行うなど、陰に日向に詩人を経済面で助けたことは知られている。文学史上ではユイスマンスやプルーストの作中人物のモデルとして有名だが、自身も回想録などを残している。また彼はフォーレの作品の理解者でもあった。フォーレはモンテスキウと知り合い、彼から教えられたヴェルレーヌ作品と運命的出会いを果たし、そこから名作「月の光」や連作歌曲『優しい歌』が生まれたことはよく知られている。また実際にこの二人の芸術家が顔を合わせることになる際もおそらくはモンテスキウの仲介があったのであろう。ヴェルレーヌとフォーレに関係する事項について、最も耳を傾けるべき証言者は彼をおいてはないはずだ。にもかかわらず従来この人物の証言についてはあまり注意を払われてこなかった。異色の存在と見られていたこの人物への偏見が大きく作用してきたためであろうか。二つある彼の証言を見てみよう。

> Le Temple, c'était Saint-Etienne-du-Mont, avec ses dentelles de pierre, et le voisinage éloquent de dépouilles historiques. Fauré y était accouru, de son propre mouvement pour faire pleurer les orgues en l'honneur de son collaborateur né, de Verlaine dont c'est une des gloires d'avoir inspiré le musicien exquisement savant, merveilleusement subtil. Ah ! *ce motu proprio*, que de graves et de gracieuses coopérations on lui dut ce jour-là ! (Robert de Montesquiou, 《De Verlanâ》, *La Revue Verlainienne*, pp.6-7)

Les funérailles furent belles, d'allégresse spontanée, à Saint-Etienne-du-Mont; Fauré tenait l'orgue, et le lui devait bien, pour les ravissantes mélodies que le poète lui avait inspirées, j'ose dire, à mon instigation, car je me vante d'avoir, le premier, remis aux mains de ce grand musicien le mince volume qui contenait le point de départ d'une collaboration si bien assortie. (Robert de Montesquiou, 《Extrait》 de *Les Pas effacés,* p.63)

前者は『ヴェルレーヌ誌』の創刊号掲載の記事から、後者はモンテスキウの死後公刊された回想録『消された足跡』からのものである。以上の記述はフォーレのオルガン演奏について相当字数を割いて詳しく述べている点に特徴がある。これまでの証言でこれほど熱心にフォーレの役割を称えたものはなかった。「フォーレは生れながらの共同制作者たるヴェルレーヌに敬意を表するべく、オルガンを泣かせようと自発的に駆けつけていたのだ」、「フォーレはオルガンを担当していたが、詩人が彼に霊感を与えたことで生まれた魅惑的な歌曲への返礼として、それは当然のことだった」といった文言は極めて明快で、事実に基づくという印象である。後者の引用にあるように、この記述にはヴェルレーヌとフォーレという偉大な芸術家を結びつけたことへの自画自賛という面が多分に感じられる。それが彼の証言が採用されてこなかった理由の一つかもしれないが、フォーレが演奏したという証言そのもを疑う理由はない。むろん、フォーレに組する立場から、競演したはずのデュボワについては敢えて無視をしたという疑惑を持たれるかもしれない。だが、そもそもデュボワがフォーレのように「自発的に駆けつける」理由が見当たらないのだ。この表現からも伺えるように、フォーレはあくまで一人の参列者としてやって来たのだ。職務としてではないし、頼まれたわけでもない。そしてフォーレにはその理由があったし、デュボワにはなかった。

3．葬儀の状況と各証言の検討

以上の各証言を整理してみると、最も古い『ラ・プリュム』誌のデュボワ説が基調となり、次いで登場したルペルチエのフォーレ説も無視し難く、その両者をいわば折衷したカザルス/ル・ルージュの説が受け入れられる形になったというのが現在に到る経過と言えるのではないだろうか。ヴィドール説はほぼ葬られていると言えるが、それは先にも述べたような事情で、本論でもこれ以上は問題にしない。さてそれでは最後の折衷説が果たして真相であったろうか。論者はこれまで無視されてきたモンテスキウという証言者が加わったことで、一層ルペルチエの証言に信を置くことができ、フォーレ単独説を支持するのだが、それを以下に説明したい。

まず死亡時におけるヴェルレーヌの状況である。ルコント・ドリール亡き後「詩王」に選出され、幾つかのカフェの常連客として酔いどれの「呪われた詩人」の伝説を振りまいた有名人物であったのは確かである。今日でも彼の酩酊する様を捉えたデッサンや写真が絵葉書として手に入るが、それらは当時の新聞・雑誌等の誌面を飾ったものである。この知名度が彼の葬儀に大勢の一般市民までもが参列した要因であったろう。とはいえ、病院と安宿の間を転々としながら、友人の支援と公的援助のおかげで何とか生き延びてきたアルコール中毒患者、過去に一度ならず投獄歴のある、パリ・コミューンにも参加した放蕩無頼の男、偉大な「詩人」と呼ぶ者もいるが、行政府の中枢にあるような人士で、彼らの読み慣わした伝統的な作品とはかけ離れたその作品をまともに読んだ者はほとんどあるまい。おそらくその程度の存在であったはずだ。モンテスキウ伯爵を始めとする支援者の働き掛けがあったればこそ、多くの貴顕の士や公的職階にある人々からも援助の手が差し伸べられはしたが、にも関わらず、ヴェルレーヌは一介の市井の人物の域をそれほどは出ていなかったはずだ。彼の葬儀の費用は幾らであったか。例えば『ラ・プリュム』誌は「費用998フランは芸術大臣より500フラン、コペーより300フラン、ルペルチエ、バレス、モンテスキウ伯爵、ポール・ヴェロラによって埋め合わされた（p.121）」と記す。これに対して、葬儀やデスマスクの製作依頼等を手配し、「政府からの自

発的援助」を受けいれたのもヴァニエであると記すのはシャルル・ドノスである。続けて「フランソワ・コペーもまた等しく支援しようと申し入れた。他の者たちは、ロベール・ド・モンテスキウ伯爵のように、分担を約束していながら、支払いは忘れてしまった」とも書いている（Donos pp.252-253)。しかしルペルチエは「一つの伝説を終わりにするために言うが、ヴァニエはヴェルレーヌの葬儀費用の支払いをしたことなど一切なく」、「教育・芸術大臣名で支給された500フランがルージョン氏より手渡された」事実をその当のルージョン氏（後にアカデミー終身秘書官になる）から聞いたと記す。そして不足分については、特に名を挙げないが、友人間で分担したと言う（Lepelletier pp.542-543)。詩人の親友を自負する両者の言い分として興味深いが、真相は両者の中間あたりにあるのではないか。ルペルチエを始めとする旧友らとヴァニエの間がしっくりしていなかったのは葬儀の手配の件からも伺える。出版者として常々前払いなどの形でヴェルレーヌを援助していたヴァニエには詩人の擁護者としての自負があったろうし、ルペルチエら旧友からすれば詩人を搾取する資本家ぐらいにしか見えていなかったかもしれない。そもそもヴァニエについてのドノスの記述を全面的に信頼するわけには行かない。彼の詩人伝は最も早期のものとして貴重な文献ではあるが、彼自身は詩人と生前から交友関係を持っていたわけではなさそうである。他にはベルギー領コンゴに関する著作など知られるくらいだが、彼が詩人の評伝を書くに至った経緯は不明である。同書の表書きにもある通り、この評伝はヴァニエが集めていた資料に基づいて書かれ、かつヴァニエ社刊である。ヴァニエ社はヴェルレーヌの死と同年、このドノスによる評伝と同じ題名の書籍の予約出版を公示している（*Bibliographie de la France*, janvier-juin 1896, p.104)。そこには特に著者名の記載はなく「ヴァニエにより収集された覚書、回想、書簡」という説明が付記されているのみである。おそらく、この出版を実現する前にヴァニエ自身が詩人の後を追うように亡くなってしまったので、代役として立てられたのがドノスだったのではあるまいか。そうとすれば、ことヴァニエ自身に関わる記述については割り引いて読まなければなるまい。

葬儀費用については、他にプティフィスが1,169フランとしている。教育・

芸術省からの援助金500フランがヴァニエを通して支給されたこと、それ以外の費用はやはりルペルチエの言うように友人らにより補われた旨記しているが、残念ながらここでもその根拠となった資料は明確ではない（Petitfils p.463)。ところで、各種の評伝や雑誌記事などで、ヴェルレーヌへの公的支援の母体として名が挙げられるものに、芸術省（大臣)、教育省（大臣)、あるいは教育・芸術省（大臣）といった記述がある。詩人の亡くなった当時は教育省と芸術省の大臣は兼任であった。別の大臣の下に在った時期もあるので、筆記者ごとにさまざまな言い方になったものと思われる。また時々の担当者の所属部局が教育関係、芸術関係と様々であったための混乱があったのでもあろうか。ともかく、葬儀に際して公的支援が500フランあったこと、それが出版者ヴァニエを介して支払われたことは確かであろう。これがまたヴァニエが葬儀費用を支払ったという「伝説」の生まれた要因と、ルペルチエが非難する根拠にもなったかもしれない。演劇の分野でヒット作を飛ばし、文壇の旧友らの中で最も裕福であったろうコペーが最も多くを負担したのは頷ける。他の友人たちもヴァニエ自身もそれぞれ不足分を分担したのだろうが、細かな収支報告などが残されなかったため友人間で軋轢が生じたということではなかったか。これに絡んで別に面白い証言がある。フォーレ同様、ヴェルレーヌの詩に作曲した音楽家の一人として知られるレイナルド・アーンが、詩人と親しいモンテスキウ伯爵に対して葬儀費用の足しにと幾らかの金額を送ったのだが、必要なかったからと、「ある不快な言葉と共に」(avec un mot qui m'a déplu) 送り返されて憤慨したことを、葬儀の翌日の話として日記に書いている (Drillon pp.58-59)。断りの真の理由は明確ではないが、やはりそれほど費用は掛からなかったと考えて差し支えないだろう。実際、当初埋葬式だけと決まったのも、友人らの持ち出しで何とかなる程度が考えられたためだろう。教育・芸術省からの500フランだが、実は詩人の死の２年ほど前から救済金名目で３度にわたり支給されていた支給額がやはり各500フランであって、結局この葬儀に支払われた金額も同じ名目で支給予定だったもののようだ。教会でのミサが加えられたが、これもそれほど費用の掛かるものではなく、『ル・モンド』の記事によると「３等級の儀式」(Drillon p.39) で、また『プリュム』誌その他にしばしば記述され

るように使用された霊柩車は「５等級」のものだった。1,000フラン前後の費用が掛かったわけだが、当時の１フランが現在の邦貨にして1,000円程度（鹿島茂p.171）とすると100万円ほどというわけで、決して巨費が費やされたというわけではない。

また時間の推移の面から見てもこの葬儀は普通のものであった。ヴェルレーヌの臨終から葬儀に到る経過は概ね以下のようだった。1896年１月８日の夕刻（午後７時から８時頃）詩人が亡くなる。同夜、ヴァニエらにより、10日午後２時に埋葬を行うと決められる。ところが夜半過ぎに遅れて到着したコペーらから立派なカトリック信者に相応しいミサを行うべきと異議があり、結局10日の午前10時に教区のサン・テチエンヌ・デュ・モン教会でミサが、午後２時に詩人の父母の眠るバティニョル墓地で埋葬ということに決した。それからヴァニエにより葬儀の広告文が起草され手配がなされた（この文書は『ラ・プリュム』誌などに転載されている）。つまり９日の朝一番で新聞等に広告が出たにせよ、葬儀の開始までは辛うじて１日を残すのみである。ところでこの広告文はヴェルレーヌの遺児ジョルジュの名を喪主として書かれている。詩人の息子への思い、例えば詩集『愛』（*Amour*）を締めくくる献呈詩「ジョルジュ・ヴェルレーヌに」（*A Georges Verlaine*）などを知る友人らからすれば、これは当然のことであっただろう。しかし息子は出席しなかった。マチルドの妨害があったのではと世上噂されることになり、後にマチルドは誌上での弁明を余儀なくされるが、それによるとジョルジュは以前滞在したアルジェリアで発した病気の再発のせいで、当時軍務服役中かつ療養中でリールの連隊にあり、出席は不可能であったという。それを特に疑う理由はないが、そうでなくても、詩人が息子と恒常的な連絡を取り合える状況にはなかったことを思えば、翌日の葬儀に間に合うようなタイミングで確実に連絡を取れたとも思えない。あわただしい日程であったのは確かである。

もし国葬ともなれば時間は当然掛かる。例えばヴィクトル・ユゴーは1885年５月22日に死去、同月31日に凱旋門に安置後、６月１日にパンテオンで国葬が執り行われた。また音楽家シャルル・グノーは1893年10月18日に死去、同月27日にマドレーヌ寺院で国葬となった。この時グノーの未亡人からフォーレに対

し、マドレーヌ寺院の前オルガン奏者であるサン・サーンスにミサでのオルガン演奏を承諾してほしい旨の依頼があったという。グノーとデュボワの間には生前しっくりしないことがあったようだ。だがフォーレはデュボワが自分の役目を渡すとは思われないと、サン・サーンスに書いている（『サン・サーンスとフォーレ往復書簡集』p.103)。実際デュボワは国葬での演奏という自分の務めを果たし、フォーレも補助的な演奏を行った。そのサン・サーンスもフォーレも20世紀になって国葬の礼を受ける。前者は1921年12月16日アルジェで死去、同月19日アルジェの大聖堂で聖別、同24日にパリ帰還後、マドレーヌ寺院で国葬。後者は1924年11月４日死去、同８日にやはりマドレーヌ寺院で国葬である。古い例ほど日数が掛かっているのが分る。フォーレの死後４日目が最も短いが、それでも死後２日目のヴェルレーヌより長い。国葬でない例を見ると、ボードレールは1867年８月31日に死去、９月２日に葬儀、マラルメは1898年９月９日死去、同月11日にミサはなく埋葬式が行われた。いずれもヴェルレーヌ同様の日程である。

少々煩雑になったがヴェルレーヌの葬儀の実像は理解できただろう。国葬やそれに匹敵するような葬儀ともなれば、それなりの準備期間と費用が掛かる。そしてヴェルレーヌの場合はまったく一般の葬儀と変わらないものだった。ただ異なっていたのは、全く自発的に集まり、詩人の喪を悼もうとした人々の多さである。そしてそこにはある種のイヴェントへの参加といった群集心理の側面も多分にあっただろう。しかしそれは誰かが想定し計算した結果ではなかった。葬儀の体制そのものは、費用の分担に際して仲間割れが生じるほどのものであった。そこへ国葬級の務めを果たす教会所属のオルガン奏者がわざわざ二人も出向いて来たとは考えられないし、そのような命令なり依頼が出されようはずもなかったし、またそれを準備するだけの時間的余裕もなかった。マドレーヌ寺院がいかに重要な教会とはいえ、基本的には教区教会としての役割を持った教会であり、そこに所属する音楽家は通常そこで行われる儀式に専従するはずである。先に挙げたグノーの国葬におけるデュボワの職務姿勢からもそれは伺えよう。一方、ヴェルレーヌの葬儀が執り行われたサン・テチエンヌ教会はと言えば、やはり教区教会ではあるが、伝えられる歴史はパリでも最も古いも

のに属し、パスカルとラシーヌが眠る教会としても有名である。17世紀前半に作られた立派なオルガンを有し、20世紀の代表的作曲家の一人モーリス・デュルフレがオルガン奏者を勤めていたことも知られる。おそらくヴェルレーヌの葬儀当時にあっても専属のオルガン奏者は在籍していたであろう。論者は『ラ・プリュム』誌を始めとする記述に登場する合唱隊長グロという人物がこれに当たるものと考える。合唱隊長という職はその名が示すような合唱の指揮指導のみならず、同職にあったフォーレの例からも分かるが、主席オルガン奏者の補助・代行も務める職である。重要度の低い式典では単独で職務を行う場合もあった。おそらくヴェルレーヌの葬儀が「3等級」のものであったため、主席オルガン奏者の出番は無かったのかもしれない。また、彼はこのミサにおいては聖歌合唱の指揮を務めたと記されているのみであるので、今回はオルガンは担当せず、伴奏なしの合唱を指揮しただけと考えるのが妥当かもしれない。そしてそのミサ聖句を歌う合唱とは別に、「憐れみを、イエス」をオルガンで演奏したのがフォーレだったのではないか。彼ならば、モンテスキウの言う如く、勤めとしてではなく「自発的に駆けつけていた」としても不思議はない。しかしデュボワにそのような義務も心情もなかったはずだ。

デュボワ説を無視し難いものとしているのは、結局『ラ・プリュム』誌という一級の資料にその名が明記されているためだ。が、その記事中には所々おかしな記述がある。先に引用した箇所の冒頭に「読誦ミサが合唱隊長グロ氏の指揮のもと全合唱により単旋律聖歌で歌われ、助任司祭シャーヌ師により挙行された（p.119)」とある。ここでおかしいのが一般に「読誦ミサ」という訳語が用いらる《messe basse》の語である。この語は「歌と音楽を伴わないミサ」を意味し、それらを伴う《grand-messe》と対比される。ところがこの記事はミサが「歌われた」と明言しているのである。ルペルチエなども確かに「歌と音楽を伴った」儀式と記している。何故この「読誦ミサ」という語を『ラ・プリュム』誌の記者は用いたのか。おそらく彼はこの用語の意味を誤解し、《basse》（低い、下級の）という形容詞に引きずられ、「3等級」の小規模なミサという意味で使用したのではあるまいか。しかしそれはある程度無理もないことで、例えばフォーレの作品に《Messe basse》と題された曲があるよう

に、19世紀にあっては音楽を伴っても小規模のミサについてはこの語を誤って、あるいは意図して用いる例があったのかもしれない。しかしこの記述がその後の研究に与えた影響は大きい。《messe basse》という語の正確な意味を知るプチフィスやビュイジーヌは「ミサは唱えられた」(《La messe est dite》)と記すことになるのだから。しかし合唱があったのも確かなようなので、ミサ本体と切り離すようにしてニデルメイエールの「憐れみを、イエス」が合唱隊によって歌われたと記すことになる。しかし初期の記録者たちはこの点については一致していて、担当者の名こそ違え、この曲はオルガンで演奏されたのであって、歌われたのではないのだ。『ラ・プリュム』誌の記述には他にもおかしなところがある。式当日の時間進行についてだが、午前10時半に出棺の議式、棺が墓地に着いた時間は午前11時としている(同頁)。これは不可能な速さだ。わずか30分でミサの挙行と5キロ以上の葬送の行進ができるわけはない。埋葬は午後2時だったはずだ。むろんこれはうっかりミスであろう。詩人の死後わずかな日数でこの大部の特集号がまとめられたことを思えば、上の言葉の誤用にしろ記事全体の信憑性を危うくするほど決定的なミスとまで云えないだろう。出棺式に際しては、さして広くはないデカルト街を5千もの人が埋めたという(Cazals/Le Rouge, p.27)。通常なら歩いて5分の教会への道のりも随分掛かったことであろう。教会に入りきれない群衆は目と鼻の先のパンテオン前の広場にまで溢れたという。そしてそのパンテオン前からパリの中心部を通り、バティニョル墓地まで道中多くの人々を引き連れての葬送の列は確かに国葬を思わす大イヴェントと見えたことだろうし、取材に当たる記者も忙しかったはずだ。ミサを主導した司祭の名や教会所属の聖歌隊長の名なら教会関係者でなくとも教区の熱心な信徒にでも尋ねればすぐに知れただろう。しかしその教会に所属しない人物が急遽オルガン演奏を行ったのならその人物の名を知るのは容易ではない。しかしその演奏がモンテスキウやルペルチエの証言から推測できるように、大変な感銘を与えたとしたら、詳しい曲名や作曲家名まで記し演奏家の名までも記すのは当然であっただろう。友人とは異なり信心とは程遠いルペルチエの記述は意味深である。ミサという語さえ使わず「宗教儀式」と表現するなど、およそミサの様子や司祭の名などには興味も示さないのに、「歌と音楽

を伴って」いたこと、そして「フォーレがオルガンを受け持った」という点だけはしっかり記憶していたのだ。彼の心に残ったのは典礼そのもではなく音楽だったのだ。おそらく『ラ・プリュム』誌の記者はオルガン奏者について教会関係者に尋ねたに違いない。その答えは「マドレーヌ寺院から来た者だ」というものではなかったか。その後、彼はマドレーヌに問い合わせる。すると「オルガン奏者」の職にあるのはデュボワだと知る。それが間違いの始まりではなかったか。

ルペルチエもフォーレを個人的には知ってはいなかったと思われる。それはルペルチエの評伝の次のようなミスからも伺える。引用に在るとおり彼の書物にはフォーレの名が刻まれている。ところで同書の巻末には人名インデックスがあって、「ヴェルレーヌと著者自身を除くすべての名前を掲載」していることになっている。ところがそこにフォーレの名は見当たらないのだ。これもうっかりミスである。そしてフォーレの名は、ルペルチエにとって、そのミスを放置しても気付かない程度のものだったということである。著者生前に再版も出ているが訂正はなされていない。ルペルチエから４年後に出版されるカザルスとル・ルージュの評伝では逆にこのフォーレの名が特筆されているのは先に引用したとおりである。フォーレも一部ではかなりその名を知られるようになってきていたわけだが、ルペルチエは関心がなかったのだろう。そもそも「聖歌隊長フォーレ」(le maître de chapelle Fauré) という記述にしてもよく知る人物のことを記した表現とは思われない。しかしその名だけはしっかり覚えていた、それ程感銘を受けた演奏だったということではなかったか。彼はその名をどうして知ったのか。これは葬儀の間ずっと側にいたはずの、この音楽家のことをよく知る人物から聞き知ったに違いない。つまりモンテスキウ伯爵から。

フォーレ説を強化する点がもう一つある。それは演奏されたとされる曲とその作曲家の名前だ。ニデルメイエールの「憐れみを、イエス」、そう聞けばフォーレ愛好家なら大いに頷くはずだ。ニデルメイエールはフォーレが音楽家としての教育を受けた学院の院長であり、そこでかれは伝統的な教会音楽を学んだのだ。ピアノ教師であったサン・サーンスと知己を得たのもそこでのことだ。ニデルメイエールの学院の方針は古典音楽の復活と再生にあった。19世紀の教会

は、オッフェンバックのような世俗の音楽を演奏することに寛大であった、というだけでなくそれに満足もしていた。フォーレが教会での音楽職に就任した当時でさえそうだったが、しだいに伝統的な教会音楽が見直されるようになるのは、ニデルメイエールの学院などの功績であった。「単旋律聖歌」、つまりグレゴリオ聖歌で代表される形式の歌でミサが行われたこのサン・テチエンヌ・デュ・モン教会はすでに伝統に回帰した教会であったわけだ。ニデルメイエールの曲も恒常的に演奏されていたかもしれないし、学院出身の、つまりフォーレと同窓の音楽家が所属していたかもしれない。ところで演奏された曲についてだが、『ニュー・グローヴ音楽事典』によると、一般に17世紀イタリアのアレッサンドロ・ストラデッラ作とされるアリア「哀れみを、主よ」(*Pietà, Signore*) はニデルメイエールの作である可能性が高いという。この曲名と問題の曲の名が酷似していることはすぐに分かろう。演奏されたのはこの曲だったのではなかろうか。他方、フォーレ自身の作品目録には全く同名の「憐れみを、イエス」という曲がある。あの『レクイエム』の中の曲である。ネクトゥーによれば、「フォーレの「憐れみを、イエス」は古風ながら『レクイエム』の中心に置かれた感動的な曲 (Nectoux, p.144) 」であるが、当時はなかなか評価されなかった。マドレーヌでの本務では自作を演奏する機会をあまり得られなかったフォーレがヴェルレーヌの葬儀という場でそれを披露したとは考えられないか。ただ自作であると言うのがはばかられて恩師の作を装ったのではないか。そうであれば今日我々の眼から見れば極めて感動的な光景であったことになるのだが、これはまったく憶測ではある。むろん教会音楽の作曲もしたニデルメイエールであるから、上のアリアとは別のまさしくこの題名の曲があった可能性は否定できない。いずれにせよ、デュボワのようなパリ音楽院出身者、つまりラヴェル事件でも伺える権威主義の塊と見られるような存在が、見下してもいただろうフォーレやその母校に因縁の深いニデルメイエールの曲を演奏したとするのもまた大変考え難いことなのだ。

結　論

ここまで議論を続けてきたが、本論者は以上の各証言の分析、並びにヴェルレーヌの葬儀当時の諸状況から推察して、詩人の葬儀においてオルガン演奏を行ったのはガブリエル・フォーレただ一人であったと結論付けるものである。カザルス/ル・ルージュの両名説も同様に退けられるとは思われるが、最後に彼らが両名の名を挙げた経緯・理由を推定してみたい。彼らの著作は、まず比較的後年になって発表されたものであること、また偉大なヴェルレーヌ像を示そうという意識が描写の全体に強く表れていること、この２点から推定できるのではないだろうか。カザルスは特にそうだが、彼らは極めて側近くで晩年の詩人に接していた、それは物理的にだけではなくおそらく精神的にもそうであった。通夜から葬儀当日に訪れた膨大な弔問者、参列者の群れを見て、彼らの詩人の「偉大さ」を目の当たりにする思いだったに違いない。彼らの詩人を描く筆致は、ことに棺や霊柩車、教会の内陣等を描く様などは、一代の英雄のそれを思わせるほどである。事実は「３等級」の儀式であったが。堂内での合唱や演奏の様子に関する記述にやや混乱があるのは先にも見たとおりだ。執筆にあたり『ラ・プリュム』誌もルペルチエも当然参照したであろう。そして二人のオルガン奏者の名を見出し、その扱いを考えただろう。彼らの書物が成る頃には、彼ら自身注記するように、フォーレはパリ音楽院の院長であり、デュボワは前任者であった。『ラ・プリュム』誌とルペルチエの記述は相反する矛盾ではなく、ヴェルレーヌの葬儀の偉大さを互いに補強する証言として、今や著名な二人もの音楽家が詩人の喪を悼んだのだという「事実」として、彼らは認識したのではないか。モンドールが注意深く両説を併記したのとは異なり、どちらも正しいとしたその結果が彼らの記述ではなかったか、そのように考えるのである（本論は日本フランス語フランス文学会2006年度秋季大会で発表された研究を修正・発展させたものである）。

引用文献

Antoine Adam, *Verlaine, l'homme et l'œuvre,* Paris, Hatier-Boivin, 1953; Paris, Hatier, 1965.

Bibliographie de la France, janvier-juin 1896.

Alain Buisine, *Paul Verlaine, histoire d'un corps,* Paris, Tallandier, 1995.

F.A. Cazals et Gustave le Rouge, *Les Derniers jours de Paul Verlaine,* Paris, Mercure de France, 1911; réédition, 1923 (Genève, Slatkine Reprints, 1983).

Fernand Clerget, *Paul Verlaine et ses contemporains*, Paris, Bibliothèque de l'Association, 1897 (Genève, Slatkine Reprints, 1980).

Ernest Delahaye, *Verlaine,* Paris, Messein, 1919 (Genève, Slatkine Reprints, 1982).

Charles Donos (de Martrin- Donos), *Verlaine intime*, Paris, Vanier, 1898 (Genève, Slatkine Reprints, 1983).

Edmond et Jules de Goncourt, *Jounal*, Paris, Flammarion, 1956; Paris, Laffont, 1989.

Edmond Lepelletier, *Paul Verlaine , sa vie, son, œuvre*, Paris, Mercure de France, 1907; réédition, 1923 (Genève, Slatkine Reprints, 1982).

Henri Mondor, *L'Amitié de Verlaine et de Mallarmé,* Paris, Gallimard, 1939.

Robert de Montesquiou, 《De Verlanâ》, *La Revue Verlainienne: d'art, d'esthétique et de piété verlainienne,* n° 1, octobre 1901, pp.4-7 (Genève, Slatkine Reprints, 1974).

Jean-Michel Nectoux, *Gabriel Fauré, les voix du clair-obscur,* Paris, Flammarion, 1990.

The New Grove Dictionary of Music and Musicians, 2nd edition, dirigé par Stanley Sadie, London, Macmillan, 2001.

La Plume, n° 161, le 1er-15 février 1896.

Marcel Proust, *Correspondance*, 1896-1901, tome II, texte établie par Philip Kolb, Paris, Plon, 1976.

Aphonse Séché et Jules Bertaut, *Paul Verlaine*, Paris, Louis-Michaud, s.d.; Paris, Rasmussen, 1925.

Paul Verlaine, *Œuvres poétiques complètes*, édition originale éditée par Y.-G. Le Dantec, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1938; nouvelle édition révisée par J. Borel, 1962.

Paul Verlaine, *Œuvres complètes* (texte établi par H. de Bouillane de Lacoste et J. Borel), Club du Meilleur Livre, 2 tomes, 1959-60.

Ex-Madame Paul Verlaine, *Mémoires de ma vie*, Paris, Flammarion, 1935; Paris, Champ Vallon, 1992.

Pierre Petitfils, *Verlaine*, Paris, Julliard, 1981.

Jules Renard, *Journal*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1960.

Jean Richer, *Paul Veraine*, Paris, Seghers, 1953; réédition, 1967.

Tombeau de Verlaine, textes réunis par Jacques Drillon, Paris, Gallimard, 1995.

鹿島茂『馬車が買いたい！』白水社 1990年

『サン＝サーンスとフォーレ往復書簡集1862-1920』J.M.ネクトゥー編　大谷千正ほか訳 新評論1993年 (*Camille Saint-Saëns et Gabriel Fauré: Correspondance, soixante ans d'amitié*, texte établie par Jean-Michel Nectoux, Paris, Société Française de Musicologie, 1973)

Question sur un épisode dans la biographie de Verlaine: Qui a tenu les grandes orgues lors de la messe de funérailles

RESUME

On peut lire la mention suivante dans le tableau chronologique des *Œuvres poétiques complètes* de Paul Verlaine (édition révisée par Jaques Borel, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962): 《 *Vendredi 10 janvier:* Obsèques de Verlaine à Saint-Etienne-du-Mont, où Théodore Dubois et Gabriel Fauré sont aux grandes orgues.》 Et il en va de même pour la biographie de Verlaine par Pierre Petitfils. Mais cependant, il nous semble improbable que les deux musiciens y aient joué ensemble. Avec le 《service de troisième classe》 et le 《corbillard de cinquième classe》 les funérailles du poète n'étaient jamais luxueuses. Est-ce que c'était possible que les deux organistes de la Madelaine s'engageaient dans une messe célébrée à Saint-Etienne-du-Mont ? A regarder les relations amicales et artistiques de Verlaine et de Fauré, c'est bien possible que celui-ci a joué pour honorer la mémoire de celui-là. D'autre part, quant à Dubois, on ne sait aucun document qui montre sa liaison avec le poète. Nous avons donc remonté aux sources de la description de la messe de funérailles de Verlaine et fini par retrouver des témoins divers. Voici les principaux: *la Plume* (n° 161) cite le nom de Dubois seul, qui a excuté *Pie Jésu* de Niedermeyer; mais Edmond Lepelletier ainsi que Robert de Montesquiou affirment que Fauré a tenu les grandes orgues ; F.A. Cazals et Gustave le Rouge distribuent le rôle d'organiste à tous les deux; de plus, Jean Richer et Antoine Adam désignent un autre, Charles Widor. Nous avons éliminé d'abord ce dernier parce qu'il n'y a aucun soutien d'autre. Ensuite, en examinant ces témoignages et en enquêtant sur les conditions qui entouraient la

mort et les funérailles de Verlaine, nous avons vérifié la possibilité d'une méprise de *La Plume,* la réalité de l'histoire détaillée par Montesquiou, et l'excès de tendance à glorifier le poète chez Cazals/le Rouge. Enfin, nous arrivons à la conclusion que c'était Gabriel Fauré tout seul qui a joué *Pie Jésu* de Niedermeyer aux grandes orgues à Saint-Etienne-du-Mont.